

第42回
豊崎由美アワー

読んでいいとも！ ガイブンの輪
(年末特別企画)

「オレたち外文リーガーの
自信の一球と来年の隠し球」Vol.4

2015年12月23日(水)
八重洲ブックセンター
本店8F ギャラリー

目次

河出書房新社 島田和俊

5

群像社 島田進矢

10

国書刊行会 樽本周馬

11

作品社 青木誠也

12

松籟社 木村浩之

15

白水社 藤波健

17

早川書房 永野溪子

23

藤原編集室 藤原義也

24

河出書房新社

👑 今年のイチオシ

ミハイル・エリザーロフ『図書館大戦争』（北川和美訳）

秘密の力をもつ7つの奇書をめぐり、図書館・読書室の暗闘がはじまる。手づくりの鎧兜と殺人用の武器を身につけた<読者>たちが、おのれの全存在をかけて血みどろの戦いを繰り広げるスプラッター・ノヴェル。ロシア・ブッカー賞受賞

👑 来年の隠し球（一部仮題）

カレン・ラッセル『レモン林の吸血鬼』（松田青子訳）1月

話題沸騰『狼少女たちの聖ルーシー寮』に続く第二短編集。倦怠期の熟年吸血鬼夫婦、馬に輪廻転生する歴代大統領、蚕の身体になって製糸工場で働く女工たち……ますます想像力に富んだ全8編。

トム・ヒレンブラント『ドローンランド』（赤坂桃子訳）1月

さまざまなドローンですべてがデータ化される未来社会。サイバー空間を駆使し、欧州議会議員殺害の謎を追う捜査官が、巨大な陰謀に巻き込まれていく。ドローン国家版『1984』。

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）『心』（平川祐弘訳）1月

『骨董・怪談』につづく〈個人完訳 小泉八雲コレクション〉第2弾。明治日本を愛情をもって活写した小泉八雲。「停車場にて」「ある保守主義者」等を収めた代表作。

ジョン・スラデック『ロデリック』（柳下毅一郎訳）2月

捨てられてしまった自己学習型ロボット「ロデリック」の受難と成長を描く、スラップスティックでピカレスクなロボット・オペラ！ ついに、ほんとに、今度こそ★絶賛★ゲラ★校正中★です！

河出書房新社

デーブリーン『たんぼぼ殺し』（糸田文・山本浩司訳）2月

『ベルリン・アレクサンダー広場』の作家のグロテスクにしてポップな短編をほぼすべて集成。長編作家として知られるデーブリーンのもうひとつの姿をはじめて紹介。

ジョイス・キャロル・オーツ『邪眼——うまくいかない愛をめぐる4つの物語』（栩木玲子訳）2月

30歳年上の著名な舞台芸術家と結婚したマリアナの元へ、彼の最初の妻と姪が訪れる。先妻の失われた眼はなにを意味するのか。表題作ほか、うまくいかない愛をめぐる4つの中篇を収める。

『アルト—後期集成Ⅱ』（宇野邦一・鈴木創士監修、管啓次郎・大原宣久訳）2月

世界にも類例のないアルト—後期の極限的テキストをあつめた集成、ついに完結。本人が原著として構想していた「手先と責苦」を斬新に全訳。

マイクル・コーニイ『プロントメク！』（河出文庫、大森望訳）3月

青春SFの名作『ハローサマー、グッドバイ』のコーニイによる、英国SF協会賞受賞の最高傑作。サンリオ文庫版より35年の時を経て、大森望による新訳にて、ついに復刊。

レナ・ダナム『ありがちな女子じゃない』（山崎まどか訳）春

NYに生きる「負け女子」のリアルを描いたドラマ『GIRLS』（CS放送中）の脚本・監督・主演をつとめた現代のフェミアアイコン、レナ・ダナムが自身について描いた全米ベストセラー・エッセイ！

『エドワード・ゴリーの優雅なる秘密』（柴田元幸訳）4月

ついに！ ゴリーの回顧展を日本で開催予定です。感涙。図録となる美麗な本を作る予定です。あっという間に春でしようから果報は寝て待て（笑）。

スーザン・ソントグ『イン・アメリカ』（木幡和枝訳）4月

2000年全米図書賞受賞作。19世紀、ロシアを逃れてアメリカへ渡ったポーランド人女優マリナがユートピア幻想に駆られた仲間とともにカリフォルニアでコミュニオンを結成する。史実をもとにした長編roman。

アンナ・スタロピネツ『むずかしい年頃』（沼野恭子訳）5月

ロシアでは特異なホラー作家として賞総管めの新鋭、初短編集。ある日を境に、我が子（双子の兄）が少しずつ狂っていくシングルマザーの恐怖を、子の不気味な日記形式で綴る表題作他、全8編。

閻連科『父を思えば』（飯塚容訳）5月

『愉快』の著者による、父とその兄弟をめぐる長篇エッセイ。貧しさや過酷な労働のなか、子どもたちのために献身的に生きた世代との交感が、愛情豊かに綴られたベストセラー。

ドナ・タート『ゴールドフィンチ（上下）』（岡真知子訳）6月

ある日美術館爆破テロで母を亡くした少年が、一枚の絵画をめぐり波瀾に満ちた運命をたどる成長物語。ドナ・タート11年ぶりの超大作。ピューリッツアー賞受賞。

チママンダ・N・アディーチェ『アメリカーナ』（くぼたのぞみ訳）7月

メロドラマ仕立ての仕掛けの中に、人種、アイデンティティ、帰属の問題など、現代社会が抱えるテーマを盛り込み、三つの大陸を行き来するスケールの大きな移民の物語を展開。

イジー・クラトフヴィル『約束』（阿部賢一訳）7月

占領下の都市ブルノで、ナチ高官の鉤十字型邸宅を建てたチェコ人建築家。戦後、その過去が汚点となり秘密警察の監視下に置かれるも、妹の死を契機に、殺人犯を地下室に監禁する計画を企て……。ミラン・クンデラの直系にして、チェコ・ポストモダンの第一人者とされる作家の代表作。

河出書房新社

ウラジーミル・ソローキン『23000（氷三部作3）』（松下隆志訳）7月
23000人の仲間が集まるとき、いったい何が起こるのか。『氷』『プロの道』
につづく三部作完結編。

ゴーゴリ『死せる魂』（東海晃久訳）8月
ロシア文学のみならず世界文学の至宝を40年ぶりに新訳。農奴の戸籍を
買う男の彷徨を通してこの世界の地獄を描くゴーゴリ未完の長編。

閻連科『炸裂志』（泉京鹿訳）9月
拝金主義と欲望渦巻く現代中国を舞台に、村民百人程度の寒村が世界に名を
轟かせる大都市になるまでを描く。『愉楽』著者による最新長篇。

ウンベルト・エーコ『ヌメロ・ゼロ』（中山エツコ訳）9月
ニセ新聞の編集部を舞台に、マスコミとは、表現とは、言葉とは、など、情
報社会にどっぷり浸かっている現代人の思考の危うさについて警鐘を鳴らす、
マスコミに関わる人間必読の書。イタリアで25万部突破、世界74カ国で翻
訳の大ベストセラー！

ガブリエル・ガルシア＝マルケス『バルタサルの素晴らしい午後——ガルシ
ア＝マルケス中短篇傑作選』（野谷文昭訳）11月
ある日海から流れついた巨大な水死体をめぐり街じゅうが大騒ぎになる「こ
の世でいちばん美しい水死人」や「大佐に手紙は来ない」「エレンディラ」など、
傑作中短篇10本を収録する。

アメリア・グレイ『AM／PM』（松田青子訳）12月
大注目の新たな若手女性作家、鮮烈デビュー作。午前1時から始まる1ペ
ージ1時間の物語。猫に話しかける日常から、種に覆われる奇妙な世界へ。時
が過ぎるごとに、見知った世界がずれていく。

河出文庫

- 1月 ミシェル・ウエルベック『ある島の可能性』（中村佳子訳）
2月 イーユン・リー『黄金の少年、エメラルドの少女』（篠森ゆりこ訳）
マイクル・コーニイ『プロントメク!』（大森望訳）
3月 J=P・マンシェット『殺戮の天使』（野崎歓訳）
R・A・ラファティ『地球礁』（柳下毅一郎訳）
4月 ウラジーミル・ソローキン『青い脂』（望月哲男・松下隆志訳）
9月～ ボッカッチョ『デカメロン（上中下）』（平川祐弘訳）
11月 パトリシア・ハイスミス『太陽がいっぱい』（佐宗鈴夫訳）

『池澤夏樹＝個人編集 日本文学全集』全30巻 刊行中

古典の新訳として、また「世界文学」を構成する文学作品として、「古事記」（池澤夏樹訳）、「百人一首」（小池昌代訳）、「竹取物語」（森見登美彦訳）、「伊勢物語」（川上弘美訳）、「堤中納言物語」（中島京子訳）、「土左日記」（堀江敏幸訳）、「更級日記」（江國香織訳）、「源氏物語」（角田光代訳）、「枕草子」（酒井順子訳）、「方丈記」（高橋源一郎訳）、「徒然草」（内田樹訳）、「宇治拾遺物語」（町田康訳）、「発心集」（伊藤比呂美訳）、「日本霊異記」（伊藤比呂美訳）、「平家物語」（古川日出男訳）、「能・狂言」（岡田利規訳）、「説経節」（伊藤比呂美訳）、「曾根崎心中」（いとうせいこう訳）、「女殺油地獄」（桜庭一樹訳）、「仮名手本忠臣蔵」（松井今朝子訳）、「菅原伝授手習鑑」（三浦しをん訳）、「義経千本桜」（いしいしんじ訳）、「好色一代男」（島田雅彦訳）、「雨月物語」（円城塔訳）、「通言総籙」（いとうせいこう訳）、「春色梅児誉美」（島本理生訳）、「おくのほそ道」（松浦寿輝訳）、「たけくらべ」（川上未映子訳）を収録。

群像社

👑 今年のおススメ

ドミートリイ・パーキン『出身国』（秋草俊一郎訳） 1900 円

正直なところ、この小説が日本でどこまで通用するか、かなりの不安をかかえたままでの刊行でしたが、書評では「夢も希望もなく、ただ固着観念に根ざして生きる者たち。安易な共感や同一化を拒む彼らの軌跡とその環境を追ううちに、私たちはそれが自分たちの生とどれほど隔たっていないことを気づきだすのだ」（中村唯史、「週刊読書人」）、「登場人物たちはしばしば、机や壁との輪郭を失い、彼らの肉体感覚や感情は無機質のモノへと転移していく。…我々の生（死も含めて）を圧縮すると、こうなるのではないかと思わせるのである。」（高柳聡子、「ロシア NOW」）と、不安が杞憂であったことを教えられました。それだけに、日本語版の刊行に合わせるかのように物故した作家が惜しまれます。

ウラジーミル・サンギ『ケヴォング族の嫁取り』（田原佑子訳） 2000 円

作家のサンギが属するニヴフ族は、サハリン（樺太）北部の先住民で、北海道のアイヌとも歴史的に深い関係があり、作品の中ではアイヌと共通する習俗も描かれています。サハリンはいまや石油や天然ガスから利益をあげることに血眼になっている種族の熱い注目を浴びるところとなっていますが、そこに長く住んでいた人々の生活は、こうした小説に描かれなければ、わたしたちの目の前に立ち現れてくることはなかったでしょう。

👑 来年の一球

『レスコフ短編集』（岩浅武久訳）

企画は古くさかのぼり、長年、日の目を見る日を待ち望んでいたものですが、訳者がいよいよ動き出すようすなので、隠し球の袋から出します。ちなみに、レスコフとは、あのベンヤミンが「物語作者」という一文を捧げた知る人ぞ知る 19 世紀ロシアの小説家、屈指のストーリーテラーです。

国書刊行会（書名はすべて仮題です）

👑 今年のイチオシ

『マルセル・シュオップ全集』

マリー・ボナバルト『エドガー・ポー（I・II）』精神分析的伝記

ケイトリン・ドーティ『煙が目にしみる』火葬場勤務の女性によるノンフィクション

『ホドロフスキーのタロット奥義』ホドロフスキーのタロット解説書

イェンス・ハーデル『アルファ』天地創造を描くドイツ BD

ホームズ万国博覧会①中国篇 ホームズ連載同時期に書かれたパロディ

ファーガス・ヒューム『質屋のヘイガー』〈SHの娘たち〉シリーズ

リチャード・マクガイア『ヒア』実験的グラフィックノヴェル

ローズ・トレメイン『音楽と沈黙』17世紀デンマーク宮殿が舞台の歴史小説

ギャビン・ランバート『ジョージ・キューカー、映画を語る』

アラン・シップトン『ハリー・ニルソンの不思議な旅』

横山茂雄・若島正責任編集海外文学シリーズ（全10巻）

L・P・デイヴィス『虚構人間』

サーバン『石の環』

シャーレイ・ジャクソン『鳥の巣』

ウィリアム・トレヴァー・コレクション（全5巻）

『異国の出来事』（短篇コレクション）

『ふたつの人生』（中篇2篇）

ジャック・ヴァンス・トレジャリー（全3巻）

『宇宙探偵マグナス・リドルフ』

『キューゲルの大冒険』

『スペース・オペラ』

アルフレッド・ジャリ全集（全1巻）

作品社

👑 今年のオススメ

リディア・デイヴィス『サミュエル・ジョンソンが怒っている』岸本佐知子
訳

これぞリディア・デイヴィスの真骨頂！ 強靱な知性と鋭敏な感覚が生み出す、摩訶不思議な56の短編。

よんともに初めてお招きいただいた2012年末の会で、「来年の“隠し球”メインの1球」として紹介させていただいた本です。やっと出ました！

J. M. G. ル・クレジオ『嵐』中地義和訳

韓国南部の小島、過去の幻影に縛られる初老の男と少女の交流。ガーナからパリへ、アイデンティティーを剝奪された娘の流転。ル・クレジオ文学の本源に直結した、ふたつの精妙な中篇小説。ノーベル文学賞作家の最新刊！

つい先日まで著者が来日し、12月18日には日仏会館で、20日には東大で本書を中心にした講演を行ないました。新聞や文芸誌などでその様子も紹介されるとと思いますので、ぜひご注目ください。

昨年末に今年の刊行予定としてご紹介した9冊のうち、5冊が刊行されました。上記2冊のほか、エドウィージ・ダンティカ、佐川愛子訳『海の光のクレア』、クリスティーナ・ベイカー・クライン、田栗美奈子訳『孤児列車』（第3回フラウ文芸大賞準大賞をいただきました。ありがとうございます！）、アルノ・ガイガー、渡辺一男訳『サリーのすべて』。予告したものの以外ではパトリック・モディアノ、平中悠一訳『迷子たちの街』、ウラジーミル・ナボコフ、若島正訳『記憶よ、語れ 自伝再訪』。

👑 来年のラインナップ

リディア・デイヴィス『ブレイク・イット・ダウン』岸本佐知子訳《夏までには》

1986年に刊行された、リディア・デイヴィスの最初の単著。『ほとんど記憶のない女』、『サミュエル・ジョンソンが怒っている』へとつながっていく系譜

の短編集。34 作品収録。

アレクサンドル・デュマ『ボルジア家の興亡』田房直子訳《初夏ごろ》

チェーザレ、ルクレツィア、そして二人の父・アレッシンドロ六世。権力への欲望に取りつかれ、栄華を極めやがて滅亡へと至ったボルジア家の興亡のすべてを、壮絶に描き出す。フランスを代表する文豪大デュマの長篇小説。既刊『メアリー・スチュアート』（田房直子訳、作品社、2008年）に続く、デュマの「貴族の犯罪」シリーズからの翻訳。

ニッキー・ロフティン『ウィッシュ・ガール』代田亜香子訳《夏までには》

13歳の少年ピーターは、静かな山奥で、“ウィッシュ・ガール”と名乗る少女に出会う。癌の治療を前におじけづく少女と、家族の愛を感じられずに孤独なピーターのあいだに友情が芽生え、これから勇気をもって生きていく希望がわいてくる長篇小説。「金原瑞人選オールタイム・ベスト YA」シリーズ最新刊！

ロバート・クーヴァー『ある夜の映画館』越川芳明訳《2年熟成》

2012年に『老ピノッキオ、ヴェネツィアに帰る』（作品社）が刊行、今年も名作『ユニヴァーサル野球協会』が白水Uボックスから復刊、探偵小説/フィルム・ノワールをパロディにした二人称小説『ノワール』（作品社）も刊行されて注目が高まるポストモダン文学の雄クーヴァー。本書は、ある一日の映画館の上映プログラムの体裁をとった短篇集。チャップリンや、『オペラ座の怪人』、『カサブランカ』などの名画が、著者一流の諧謔でパロディにされる。

ファン・ガブリエル・パスケス『密告者』服部綾乃・石川隆介訳《3年熟成》

『密告者』は、第二次世界大戦直後の数年間を描いた実に力のある物語である。パスケスの想像力の豊かさ、彼の持つ言葉の優美さと鋭敏さ、本書はそれらを見事に証明している——マリオ・バルガス＝リョサ。ナチの迫害から逃れてきたユダヤ人たちの中南米での運命を重厚に描く長篇小説。

ウラジーミル・ナボコフ『道化師をごらん』メドロック麻弥訳

作品社

1974年に刊行された、ナボコフの（完結した長篇小説としては）遺作。ロシアからの亡命作家の自伝という体裁の小説だが、そこにはナボコフ自身のものとは似て非なる人生が鮮やかに描かれている。1980年に立風書房から筒井正明訳が刊行されている。

ウラジーミル・ナボコフ『青白い炎』森慎一郎訳

架空の詩人ジョン・フランシス・シェイドの999行からなる長大な詩「青白い炎」に序文と注釈と索引を付して、研究書を書き上げるキンボート。彼は詩人の隣人でロシア文学の教授でもあるのだが……実は狂人？ 既訳は、富士川義之訳で、筑摩世界文学大系の『ナボコフ、ボルヘス』の巻に収録された1984年刊行のもの。現在は岩波文庫で読める。

ウラジーミル・ナボコフ『ナボコフ・エッセイ集』秋草俊一郎編訳

日本オリジナル編集。翻訳論、演劇講義、蝶の採集記、書評、ボクシングのレポート、追悼文、自分の翻訳への序文やあとがき、語学の学び方、ボツ原稿、などなど。

松籟社

👑 今年の自信の1球

ゾフィア・ナウコフスカ『メダリオン』加藤有子訳

「東欧の想像力」シリーズ。「ホロコースト」という言葉を絶する現実を前にして、それでも言葉で捉えようとした最初期の試みにして、最良の成果の一つ。ポーランドにおけるナチス犯罪調査委員会に参加した著者が、その時の経験、および戦時下での自らの体験を踏まえて著した短編集。「縁取られた円形の肖像」をさす「メダリオン」という言葉を題に掲げ、第二次大戦中のポーランドにおける、平凡な市民たちの肖像をとらえる。ユダヤ系も含むポーランド市民たちの、ナチス・ドイツ占領下にくぐりぬけた経験をめぐる証言文学。

👑 来年の「隠し球」メインの1球

ベッペ・フェノーリオ『個人的な問題』橋本勝雄訳

イタロ・カルヴィーノの同時代人フェノーリオによるパルチザン小説。カルヴィーノが「我々の世代が書きたかった小説」と激賞したことで知られる。

戦友がファシスト軍に捕えられたとの報を受け、ひとり敵地に乗り込むパルチザン青年。彼を絶望的な行動に駆り立てるものは、同志愛か、友情か、それとも戦争の大義に殉じるという使命感か……いえいえ、動機は超個人的なもの。

※諸般の事情で刊行が遅れておりますが、来年には絶対に出します。

その他

ナーダシュ・ベーテル『ある一族の物語の終わり』早稲田みか・築瀬さやか
訳

「東欧の想像力」。ユダヤ人の少年が祖父を通して辿る家系の物語と、その終わり。

トーマス・ベルンハルト『ある子供』今井敦訳

20世紀オーストリアを代表する作家のひとりベルンハルトの、自伝的五部作のひとつ。

松籟社

エルビス・ペーテルス『火曜日』鈴木民子訳

ベルギーのとある老人が、1960年代に国軍の一員として駐留した植民地コ
ンゴでの暴力の日々を回想する。

クリスティーナ・ペリ=ロッシ『狂い船』南映子訳

王政を逃れ大西洋を挟む各地を遍歴する亡命者エキスと仲間たちをめぐる中
編小説。古今の西洋文化圏の文学テキスト、絵画、映画、そして歴史上のさま
ざまな出来事に言及しながら、同時に、天地創造を描いた中世のタペストリー
の描写を織り交ぜて綴る。

ファン・ガブリエル・バスケス『物が落ちる音』柳原孝敦訳

コロンビア麻薬戦争の時代を体験した語り手が、ビリヤード場で知り合った
ひとりの男、語り手の目の前で射殺されたある男の過去を再構成する。

2015年のメインの1球として挙げた作品ですが、ちょっと年内には間に合
わないかも……すみません……

白水社

👑 今年の一押し

呉明益『歩道橋の魔術師』天野健太郎訳

👑 来年の隠し玉

エドゥアルド・ハルフォン『ポーランドのボクサー』松本健二訳

2015年

1月

【Uブックス】（「海外小説 永遠の本棚」）

イーヴリン・ウォー『ピンフォールドの試練』吉田健一訳

2月

【エクス・リブリス】

ハリ・クンズル『民のいない神』木原善彦訳

ピンチョンとデリーロの系譜に連なる作家による長篇。砂漠にそびえる巨岩「ピナクル・ロック」。そこで起きた幼児失踪事件を中心に、先住民の伝承からUFO、カルト、イラク戦争、金融危機まで、予測不能の展開を見せる、「超越文学」の登場！

3月

宮下志朗他訳『フランス・ルネサンス文学集 学問と信仰と 第1巻』

【Uブックス】（「海外小説 永遠の本棚」）

アルフレート・クビーン『裏面 ある幻想的な物語』吉村博次・土肥美夫訳

4月

【エクス・リブリス】

呉明益『歩道橋の魔術師』天野健太郎訳

1980年代初頭、台北。物売りが立つ歩道橋には、子供たちに不思議なマジックを披露する「魔術師」がいた——。台湾でもっとも旬な若手による、ノスタルジックな連作短篇集。各紙誌で絶賛、今年の一押し！

【Uブックス】（「海外小説 永遠の本棚」）

サキ『クローヴィス物語』和爾桃子訳

白水社

5月

【エクス・リブリス・クラシックス】

イーヴリン・ウォー『スクープ』高儀進訳

新聞で「田園便り」を担当する独身男ウィリアムは、手違いから、突如外国特派員に任命される。派遣されたのは、政変が噂されるアフリカの独裁国家。怪しいスパイや政商が暗躍し、ライバル記者たちが報道合戦を繰り広げるなか、ウィリアムは人生初の恋に落ち、思いがけずスクープをものに……。 「現代の古典」として不動の地位を占める傑作長篇！

【Uボックス】（「海外小説 永遠の本棚」）

ホレス・マッコイ『彼らは魔馬を撃つ』常盤新平訳

6月

【エクス・リブリス】

甘耀明『神秘列車』白水紀子訳

台湾の歴史と土地の記憶が渦巻く六つの物語。政治犯の祖父が乗った神秘列車を探す旅に出た少年が見たものとは――。台湾の歴史の裏に埋もれた人生の物語を劇的に描く、莫言が驚嘆した台湾の新星による傑作短篇集！

7月

【Uボックス】（「海外小説 永遠の本棚」）

レオ・ベルツ『第三の魔弾』前川道介訳

8月

マルグリット・ユルスナール『なにが？ 永遠が』堀江敏幸訳

母・父・私をめぐる自伝的三部作、最終巻。若き妻を失った父ミシェル、彼が心を寄せた女性の存在。時代は戦争へと突入し、一族の物語はついに〈私〉という存在へと辿り着く。

【エクス・リブリス】

ラモーナ・オースベル『生まれるためのガイドブック』小林久美子訳

誕生、妊娠、受胎、愛を主題に、風変わりな出来事に遭遇するごく普通の人々を描く。米で大絶賛の新星による、瑞々しく繊細でチャーミングな短篇集。エイミー・ベンダー推薦、書評で山崎まどか氏が絶賛！

9月

ステイーヴン・ミルハウザー『ある夢想者の肖像』柴田元幸訳

少年が徹^{まどろ}睡みのなかで見ると、終わりのない夢……思春期の生の瞬間、その息づかいを濃密に伝える。ミルハウザー初期の傑作長篇、待望の邦訳。書評で豊崎由美、牧眞司の各氏が絶賛！

【Uボックス】（『海外小説 永遠の本棚』）

ミュリエル・スパーク『死を忘れるな』永川玲二訳

ミュリエル・スパーク『ミス・プロウディの青春』岡照雄訳

10月

【エクス・リブリス】

キルメン・ウリベ『ムシエ 小さな英雄の物語』金子奈美訳

スペイン内戦下、バスクから疎開した少女を引き取ったベルギーの若者ロベール・ムシエ。その出会いが、彼の人生を思わぬ方向へと導いていく……。それから70年近くを経て、バスクの作家によって見いだされた、無名の英雄をめぐる心揺さぶる物語。『ビルバオ - ニューヨーク - ビルバオ』の異才による、待望の最新長篇。書評で瀧井朝世、古屋美登里の各氏が称賛！

11月

【ボラーニョ・コレクション】

ロベルト・ボラーニョ『はるかな星』斎藤文字子訳

軍政下のチリ、奇抜な空中詩パフォーマンスでその名を馳せた飛行詩人カルロス・ビーダー。複数の名をもつ彼の驚くべき生涯とは――。『アメリカ大陸のナチ文学』から飛び出した、もうひとつの戦慄の物語。

12月

【エクス・リブリス】

マヌエル・ゴンザレス『ミニチュアの妻』藤井光訳

奇妙なハイジャック事件、難病持ちの音楽家、オフィス勤めのゾンビ、消えた二人の文化人類学者……ポスト・アメリカ世代の新たな鬼才による、「中毒性」をはらむ18の奇想短篇集。藤野可織氏推薦！

白水社

2016年

1月

【Uブックス】（『海外小説 永遠の本棚』）

サキ『けだものと超けだもの』和爾桃子訳

2月（以下、書名はすべて仮題）

【エクス・リブリス】

ドナル・ライアン『軋む心』岩城義人訳

舞台は現代アイルランドの郊外。ボビーは建設会社で現場監督を務めていたが、会社が倒産し、失業してしまう。ボビーの実家の門扉に細工された、錆びた鉄製ハート形に象徴される、心に傷を負った21人の登場人物の声（一人は幽霊）が、それぞれの確執や軋轢、病気や苦悩を語っていく。ボビーの父フランクが殺害される事件を中心に、ミステリアスで、ページターナー的な展開を見せる快作！

スティーフ・エリクソン『ゼロヴィル』柴田元幸訳

スキンヘッドの主人公の頭には映画『陽のあたる場所』のヒロインとヒーローが刺青されている。『嘆きの天使』『裁かるるジャンヌ』『エマニュエル夫人』などさまざまな映画が言及され、映画に組み込まれ、語り手が映画について語る。しかしそこは「魂のポストモダニスト」エリクソン、ここでの映画は情念や愛欲など、われわれの無意識や闇を形成している神話そのものなのだ。三月に開催される「第3回国際文芸フェスティバル」に合わせて来日！

3月

『フランス・ルネサンス文学集 笑いと涙と 第2巻』宮下志朗他訳

【エクス・リブリス・クラシックス】

アルフレート・デーブリー『マナス』岸本雅之訳

舞台はインド。ウダイプルの王子「マナス」は会戦から帰国し、身をもって知った恐るべき死の光景を嘆く。『マハーバーラタ』に倣い、マナスが絶望と死の淵から新生へと至る道を、独特の文体で描く。西欧の現代小説の三古典のひとつと評価される、『ベルリン・アレクサンダー広場』の作家による叙事詩的物語。古川日出男氏推薦、待望の邦訳！

4月

【Uボックス】（「海外小説 永遠の本棚」）

ワレリイ・ブリューソフ『南十字星共和国』草鹿外吉訳

5月

【エクス・リブリス】

エドゥアルド・ハルフォン『ポーランドのボクサー』松本健二訳

グアテマラのユダヤ系というマイノリティの立場から、さまざまな少数派（インディオ、ジプシーなど）の人々の「語りえぬ内側」を私小説的に描く独自の文学世界を構築。国際的な注目を集めるラテンアメリカ文学の新世代作家の本邦初紹介、表題作および「ビルエット」「修道院」の「三部作」を収録。来年の隠し玉！

6月

【ボラーニョ・コレクション】

ロベルト・ボラーニョ『第三帝国』柳原孝敦訳

『野生の探偵たち』を思わせる日記形式で、『アメリカ大陸のナチ文学』に始まり『2666』に結実する世界大戦やナチ・ドイツへの関心が、戦争ゲームという虚構の世界を通してすでに描かれている。没後、遺稿の中から発見されたという幻の長篇小説。

【エクス・リブリス・クラシックス】

イーヴリン・ウォー『ウォー初期傑作短篇集』高儀進訳

The Complete Stories of Evelyn Waugh (1999) には、ウォーの全短篇 39 篇が収められている。ここから、十代や大学時代の作品、未完の小説の断片、SF風の作品を除き、「意外な結末」を迎える面白いものを 15 篇選び収録。いずれも 1920 年代後半から 30 年代に発表された初期作品で、『スクープ』と同様作家の経験や見聞に基づく。ウォー独特のブラックユーモア、皮肉や風刺を基調とした作風で、サキやロアルド・ダールの愛読者も楽しめる日本オリジナル短篇集！

8月

【エクス・リブリス】

畢飛宇『按摩』飯塚容訳

白水社

南京の按摩屋「沙宗琪按摩センター」で働く盲目の按摩師たちの、愛情や幸福を求めての奮闘と挫折、日常生活と人間模様を活写し、20万部ベストセラーとなった話題作。盲人たちの喜びと悲しみ、善意と悪意、夢と現実をリアルに描き出し、優れた長篇小説に与えられる〈茅盾文学賞〉を受賞、英仏伊語にも翻訳された。また映画化もされ、ベルリン映画祭「銀熊賞」を受賞した。

9月

スティーヴン・ミルハウザー『魅せられし夜』柴田元幸訳

10月

【エクス・リブリス】

ハッサン・ブラシム『死体展示』藤井光訳

2012年に発表されたアラビア語版がヨルダンで直ちに発禁処分を受け、2014年にペンギン社から刊行された英訳が Publishers Weekly 年間 Top10 に選ばれた、イラク出身の新鋭による短篇集。表題作ほか、独特の奇想が悪夢に展開する14篇の短篇集。

11月

【ボラーニョ・コレクション】

ロベルト・ボラーニョ『ムッシュー・パン』松本健二訳

12月

【エクス・リブリス】

甘耀明『鬼殺し』白水紀子訳

日本統治時代の皇民化運動から、戦後国民政府の統治下で二・二八事件が起こるまでの間に、苗栗県の關牛窩村（原住民族が暮らしていた客家の村）を舞台に繰り広げられる劉興帕を主人公にした壮大な物語。「中國時報」2009年度年間ベストテン賞、2010年台北国際ブックフェア小説部門大賞、2010年博客來年度華文創作大賞受賞。

早川書房

👑 今年のおススメ

カール・オーヴェ・クナウスゴール『わが闘争 父の死』岡本健志・安藤佳子訳

執筆に励む作家カール・オーヴェ・クナウスゴールは、十年前の父の死を回想する。冷たく専制的だった父は、少年時代にも、そしてその後にも、どこか遠い存在だった——。世界の読書人を熱狂させたノルウェー人作家のベストセラー。

イリヤ・トロヤノフ『世界収集家』浅井晶子訳

大英帝国の軍人、リチャード・フランシス・バートン。インドでは様々な言語と文化に浸り、アラビアではメッカ巡礼をなすとげ、アフリカではナイルの源泉を追い求める。『千夜一夜物語』の翻訳者としても知られる桁外れの人物の生涯を、世界的に評価されるブルガリア系ドイツ人作家が、事実と虚構を織り交ぜて詩情ゆたかに描き上げた傑作長篇小説。

👑 来年の「隠し球」メインの2球

ウラジミール・ナボコフ『アーダ』若島正訳！

オルハン・パムク『頭の中の違和感（仮）』宮下遼訳

若島正編『ベスト・ストーリーズ』（全三巻）続刊

J・M・クッツェー『イエスの幼子時代（仮）』鴻巣友季子訳 5月刊

ノヴァイオレット・ブラワヨ『あたらしい名前が要る（仮）』谷崎由依訳
7月刊

トニ・モリスン『ゴッド・セイヴ・ザ・チャイルド（仮）』大社淑子訳

メアリー・チャンバレン『ダッハウの仕立屋（仮）』川副智子訳

デイヴ・エガーズ『ホログラム・フォー・ザ・キング（仮）』吉田恭子訳

ヒラリー・マンテル『鏡と光（仮）』宇佐川晶子訳 来年???

藤原編集室

👑 今年のオススメ

レオ・ベルッツ『聖ペテロの雪』垂野創一郎訳 国書刊行会

病院で目覚めたアムベルクに「あなたは五週間前に交通事故にあい、意識不明の状態にあった」と医師は言った。しかし、彼の記憶は違っていた。五週間前、ある小村に村医者として赴任したアムベルクはそこで、神聖ローマ帝国復興を夢みるフォン・マルヒン男爵の奇怪な計画に次第に巻き込まれていくが……。夢と現実、科学と奇蹟が交差する時、めくるめく記憶の迷宮がその扉を開く。

『スウェーデンの騎士』（国書刊行会）、『第三の魔弾』（白水社、復刊）も刊行。

2015年は《日本レオ・ベルッツ年》（当編集室制定）でした。

ホレス・マッコイ『彼らは廃馬を撃つ』常盤新平訳 白水Uブックス

大恐慌時代のアメリカ。ハリウッドの夢破れ、食いつめた若い男女が賞金目当てにマラソン・ダンス大会に参加する。最後の一组が残るまでひたすら踊り続ける過酷な競技の進行中に発生する様々な人間ドラマ、若者たちの希望と絶望を巧みな構成で描いたアメリカ小説の傑作。

👑 来年の隠し玉 タイトルは仮題です

◇白水社

《白水Uブックス》

サキ『けだものと超けだもの』和爾桃子訳 1月予定

ショートショートの名作「開けばなしの窓」「お話上手」など36篇を収録。切れ味鋭い諷刺とウィットが冴えわたる、短篇の名手サキの第4短篇集を全訳。『クローヴィス物語』に続くサキ作品集第二弾。挿絵エドワード・ゴリー。

ワレリイ・ブリューソフ『南十字星共和国』草鹿外吉訳

南極大陸に建設された理想都市の壊滅を描いて衝撃的な「南十字星共和国」。トルコ軍占領下の都市でスルタン側近の後宮入りを拒んで地下牢に繋がれた娘の恐るべき受難と、暗黒の中で生まれた至上の愛。皮肉な結末が胸を打つ残酷

物語「地下牢」など、全11篇を収録。20世紀初頭、ロシア象徴主義を代表する詩人・小説家ブリューソフの傑作集。

《高山宏セレクション／異貌の人文学》

ウィリアム・ウィルフォード『道化と笏杖』高山宏訳 1月予定

中世の宮廷道化、愚者文学、シェイクスピア劇から現代の映画まで、秩序と混沌の間に立ち、世界に混乱と豊饒をもたらす〈道化〉の元型的イメージを探り、その機能を論じた道化論の決定版。

ロザリー・L・コリー『シェイクスピアの生ける芸術』正岡和恵訳

名著『パラドクシア・エビデミカ』のコリーが、英国ルネサンス最大の作家にしてパラドキスト、シェイクスピアに取り組み、その文学世界を様々な角度から論じる。

エルンスト・グラッシ『形象の力』原研二訳

デカルトの合理主義に対して、形象、ファンタジー、芸術の力の優位を説く、ホッケ『迷宮としての世界』を世に送り出した碩学による、マニエリスム形象論にして人文主義復興宣言。

◇筑摩書房

ロバート・エイクマン『奥の部屋』今本渉訳（ちくま文庫）1月予定

謎めいた象徴、魂の奥処をゆさぶる深い戦慄によって、幽霊不在の時代における新しい恐怖を描いたモダン・ホラーの極北エイクマンの傑作集。国書刊行会〈魔法の本棚〉版に「何と冷たい小さな君の手よ」、新訳「スタア来臨」を追加収録した増補決定版。

ヘレン・マクロイ『その名はウィリング』渕上瘦平訳（ちくま文庫）

精神科医ベイジル・ウィリング博士は自分の名を騙る偽者を追って、ある屋敷のパーティ会場に辿り着くが、奇妙な殺人事件に巻き込まれてしまう。発端の意外性と謎解きの興味。好評『あなたは誰？』に続くマクロイ・ミステリ第

藤原編集室

二弾は、さらに円熟味を増した中期作。

アンドレ・ド・ロルド『ロルドの恐怖劇場』平岡敦訳（ちくま文庫）

殺人、人体実験、拷問、復讐等の残酷場面を売り物にした恐怖演劇で 20 世紀初めのパリを席捲したグラン＝ギニョル劇場の看板作家ロルドの〈恐怖の快楽〉に満ちた短篇を集成。

◇国書刊行会

フランシス・M・ネヴィンズ『エラーリー・クイーン 推理の芸術』飯城勇三
訳

〈国名シリーズ〉『災厄の町』『Yの悲劇』等で知られる本格ミステリの巨匠の評伝。デビューから晩年まで、「アメリカの探偵小説そのもの」と評された作家・編集者活動の足跡を丹念に辿り、ダネイとリー合作の内幕や代作問題などの新情報を盛り込んだ決定版。詳細な邦訳リストなど付録も充実。

◇創元推理文庫

J・S・レ・ファニユ『ドラゴン・ヴォラントの部屋』千葉康樹訳

旅行中の英国青年ベケットは、パリへの途上で老貴族とその若く美しい妻と出会う。三人は宿屋に泊まるが、ベケットに割り当てられたのは、過去三度、錠の下りた部屋から宿泊客が消え失せた「呪いの部屋」だった。ヴィクトリアン・スリラーの名作に怪奇短篇を併録。